

Title	シドニーと同時代の詩人たち : サー・フィリップ・シドニー研究
Author(s)	村里, 好俊
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57895">https://hdl.handle.net/11094/57895</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【61】

氏名	村 里 好 俊
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 24073 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	シドニーと同時代の詩人たち—サー・フィリップ・シドニー研究—
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲  (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イギリス・ルネサンス文学を代表する詩人サー・フィリップ・シドニー（1554-86）を取り上げ、詩、劇、批評、散文ロマンスなどのさまざまなジャンルにわたって創作したシドニーの文学的業績の総体を当時の文学的・文化的・政治的状況との関わりの中で分析・検証することにより、シドニー文学のもつ新しい意味を掘り起こそうとした研究である。論文全体は、序章、7つの章、終章と、注・参考文献から構成されており、総頁A4判で296頁、400字詰め原稿用紙に換算して約850枚からなる大部の論文である。

論者は、序章において、シドニーを取り巻く特に政治的状況のもつ意味に注目し、詩人・宮廷人・政治家・軍人であったシドニーがエリザベス女王およびその側近たちから遠ざけられていく環境の中で、さまざまな文学ジャンルにわたる文学創造活動を行った事実の意味を強調する。論者によれば、シドニーとは、エリザベス朝の宮廷人としての高潔、華麗、武勇、剛毅などの美質を備えた詩人でありながら、その内面においては現実との軋轢、鬱屈、苦悩などを抱えた詩人であって、そうした詩人を取り巻く現実的葛藤という側面を意識しながら作品群を読み解くことが重要だと述べ、以下、シドニーの代表的作品を考察の対象に取り上げていく。

第1章は、初期作品『五月祭の佳人』を当時の政治的宗教的状況から浮かび上がる暗示

的象徴的意味合いを探りつつ分析し、詩人の真の創作意図を明らかにする。第2章「シドニーの詩観と同時代の詩人たち」は、シドニーの批評エッセイ『詩の擁護』の検証を通してその詩観を明らかにし、この詩観にもとづき、クリストファー・マーロー、サミュエル・ダニエル、マイクル・ドレイトン、エドモンド・スペンサーらの同時代の詩人たちの恋愛詩との比較研究を行い、シドニーの詩の特質を明らかにする。第3章「シドニーからシェイクスピアへ」では、シェイクスピアの詩作品（『ヴィーナスとアドニス』など）を論じて、シドニーのソネット詩との比較的考察の道を探る。第4章『アストロフィルとステラ』論』では、連作ソネット詩集『アストロフィルとステラ』をペトラルカの恋愛詩を踏まえつつ綿密に分析を行い、「ものを言う絵」という絵画的詩的表現などの新機軸の導入がシドニーの詩に見られることを検証する。第5章『アーケイディア』論』は、この散文ロマンスの注目すべき特徴として絵画的描写を指摘する。さらに、この作品における二つの版、『オールド・アーケイディア』と『ニュー・アーケイディア』を、現代の物語理論における「ストーリー」と「プロット」の観点から分析を加えることにより、二つの版の共通面・相違面を明らかにし、それらのもつ意味を考察する。第6章「シドニーとスペンサー」は、シドニーの『アーケイディア』とエドモンド・スペンサーの代表的詩作品『妖精の女王』を、ヨーロッパの絵画の技法を照らし合わせることにより、相互の類似点と相違点を明らかにし、シドニーのパロック的特質、スペンサーのルネサンス的特質を指摘する。第7章「シドニーと二人のメアリ」は、シドニーおよびその文学にとっての妹メアリと姪メアリの果たした役割について考察し、特に姪メアリ・ロウスが女性詩人としてシドニーの詩的業績を高く評価しようとする文学的姿勢のもつ意味を分析する。

終章「<宮廷>、<脱宮廷>そして<周縁>へ」は、詩人シドニーが宮廷人として<周縁>にいたことが彼の文学的創造にとって大きな意味をもっていたことを改めて強調して、本論を終えている。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、イギリス・ルネサンス文学を代表する詩人サー・フィリップ・シドニーの主要な文学作品群を対象にして、それらの文学的業績のもつ意味を、詩人を取り巻く文学的・思想的・歴史的コンテクストを視野に入れることにより新しい視点から考察し直し、従来のシドニー文学像に修正を迫った研究である。本研究により、シドニーと、スペンサー、マーロー、シェイクスピアらに代表される彼の同時代の詩人たちとの間の緊張ないしは対立を孕んだダイナミックな相互関係が明らかになり、シドニー文学のもつ一種の現代文学に通じる特質が同時代人の文学との相違点の指摘を通して鮮やか解明されたのは、イギリス・ルネサンス文学研究にとって大きな貢献である。特に、『アストロフィルとステラ』に代表されるソネット詩作品のもつ絵画的表現についての綿密な分析とその意味の考察、ソネット詩のなかに劇的言語が並置される意味の分析、散文ロマンス『アーケイディア』が孕むポリフォニックな語りの特徴の指摘は、シドニー文学研究に新鮮な視角を切り開くものとして注目すべき論考である。牧歌的娯楽劇『五月祭の佳人』やイギリスの詩学研究に必須の『詩の擁護』に目を配ることを怠らず、さまざまな文学ジャンルに挑戦したシドニ

一のほぼ全作品を扱って、シドニー文学の全貌を捉えようとした研究は、日本においては  
いまだ産出されていない先駆的かつ野心的な業績であるがゆえに、本研究が今後のシド  
ニー研究およびルネサンス英詩の研究にとって不可欠の研究となることは間違いない。

ただし、本論文において疑問点がないわけではない。詩のテキスト自体の分析と歴史的  
コンテキストからの考察との間でいささか論理的飛躍と思われる場合が時に見られること  
がある。また、論述・表現に繰り返しが見られる部分がいづらかあるのも惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論  
文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。